

地域資源を掘り起こし、自立のむらづくり ～奈良県山添村～

「鉄道がない」「コンビニがない」「信号が一つしかない」。こんな無い無いづくしの村で自立のむらづくりが行われている。奈良県北東部に位置する山あいの村・山添村では、地元の地域資源を掘り起こし、グリーン・ツーリズムなどで地域資源を活かした観光による内発的なむらづくりが進められている。

平成の大合併という全国的な市町村合併のうねりにも流されず、自分たちの村を残そうとする取り組みをレポートする。

自立の道を選択

合併に「反対」が1,963票、「賛成」が1,545票。2003年8月に山添村で行われた、周辺市町村との合併の是非を問う住民投票の結果である。「平成の大合併」の嵐が吹き荒れる中、人口約4,700人（当時）の山あいの村は周辺市町村との合併を見送り、自立の道を選択した。

山添村は、奈良県の北東部、三重県との県境に位置する山あいの農山村。面積は66km²で、村の3分の2を森林が占める。明日香村などのように、特に全国的に有名な観光地や史跡があるわけではなく、税金を落としてくれる大企業があるわけでもない。村の主産業はお茶の栽培を中心とした農業で、兼業農家が大半である。村民の多くは、周辺部の都市で働きながら土日に農業をしている、全国どこにでもあるような農山村である。

そんな山あいの過疎の村が「自立のむらづくり」



村内に広がるお茶畑

神野山の山頂からは雄大なパノラマが望める



を選択したのである。しかし、住民のなかでも当初は「合併しないでやっていけるはずはない」という意見がたくさんあったという。財政健全化基準の一つである実質公債費比率では県下で2番目に悪い状況となっていた。

自立のむらづくり

「自立のむらづくり」の起点となったのは、村の行財政改革であった。村長の給料を2割カット、議員は定数を4人削減し給料を1割カットするなど、特別職の給料や報酬などの引き下げから手をつけていった。予算編成では、土木費を3%程度に抑え、起債の借り換えなどで金利負担の軽減をはかるなど、徹底した歳出削減を断行した。

ただ、「行財政改革」のためには、こうした涙ぐましい努力も必要だが、これで村の将来への明るい展望が開けるというわけではない。村民の士気も低下しかねない。こうした懸念のなか、「村の地域資源を活かしたむらづくりができないか」という意見をもとに「山添村の内発的開発・発展を考える会」が結成された。

同会では、地元をよく知る人に講師になってもらい村内各地の見学を開始した。講師には事前に地域の簡単な地図をつくってもらい、そこに観光スポットや文化財の位置を書き込んで案内してもらった。こうしたことを重ねていくうちに「何もない」と思っていた村には、観光資源として誇れるものがたくさんあることが分かってきた。

同会は村内をいくつかの地域に分けて、地元の

人が案内する研修会を繰り返し実施した。村には縄文時代草創期（約一万二千年前）の桐山和田遺跡など縄文遺跡がたくさんあり「縄文文化発祥の谷」と呼ばれるほどの歴史を持っていること。神野山や不思議な巨岩の川「鍋倉溪」や長寿岩、岩屋・枅型岩など巨石群があり、これがイワクラと呼ばれて全国から見学に来られること。唐招提寺や薬師寺クラスの規模を持つ国の史跡・毛原廃寺跡等さまざまな観光資源があることを再発見した。また、春には桜やツツジの花が咲き、夏にはホタルや満天の星空をはじめ自然が村一帯に残っている。



神野山山腹にある森林科学館や茶の里会館

不思議な巨岩の川「鍋倉溪」



村の南部にある史蹟「毛原廃寺跡」

奈良時代の大寺院に比肩される七堂伽藍の礎石が残っている



「観光ボランティアの会」結成

こうした活動の成果を踏まえて2006年2月に村内の有志が集まって「山添村観光ボランティアの会」が結成された。同会では、「あれがない」「これがない」と言わず、村にあるものを活かしたむらづくりを進めよう、そのためには「自分たち自身が村をよく知ることが大事だ」と論議。研修会を重ねて村にある資源（地域資源）を見出し、村民が地域ごとに案内する組織として動き出した。

こうしたボランティアグループの会の名称は、通常、観光客の案内が中心となるので、「ボランティアガイドの会」と称するケースが多い。しかし、同会の名称は単に「ボランティアの会」というのも、同会の活動は、村内の観光ガイドにとどまらないからである。研修会の開催などとあわせ、春は「桜を見る会」や山菜狩り、「つつじまつり」、夏は「ホタル観賞ツアー」や鍋倉溪のライトアップ、「七夕のつどい」や「星空観望会」など、村のさまざまなイベントを企画し開催している。

「観光ボランティアの会」には現在35人が所属。初年度の06年度は13回ガイドを実施、130人を案内した。翌07年度は57回、392人、08年度は89回、779人、09年度は11月までで既に750人と案内回数、人数とも拡大している。

フォトコンテストで村の魅力再発見

地域を再発見するうえで、もう一つのきっかけとなったのは、2007年に行われたフォトコンテストであった。村民は、普段目になっている村の風景には感動しない。あまりに日常的すぎてその良さがわからない。そこで、村外の人が村の自然や風景をどのようにとらえているかを知り、観光資源として活かさないかと考えて、参加者を村内だけでなく村外からも募ってフォトコンテストを開催した。

審査委員長には、著名な写真家の井上博道さんをお願いした。しかし、コンテストの実施・運営

には賞金や審査員に対する謝礼その他、多額の経費がかかる。村には「お金がない」ということで、実行委員が村内の企業や団体などに協力を求めて資金集めに奔走した。

そうした努力の甲斐あって、フォトコンテストには181点もの出展があった。村の自然や風景、文化、習俗など、普段見慣れているものが新たな評価の対象となったことで、山添村の地域資源の掘り起こしにつながった。

農村民泊に取り組む

村の観光を進めていくうえで画期となったのが、宿泊観光への取り組みである。村の有志で構成する「山添村観光ボランティアの会」は、2007年度に奈良県が実施した「宿泊観光を促す地域の魅力づくり事業」に応募。「山添村の地域資源を活かした観光による内発的むらづくり」と題してプレゼンを行い、採択され、100万円の補助金を獲得した。

村内には、築100年を越す歴史と文化をつなぐ民家が多く、空き部屋もたくさんある。各家の造りも大きく、行事などで大勢の人が集まっても対応ができる構造である。そして何にもまして、村民は祭りやお葬式などで、人をもてなすためのノウハウに長けている。こうした、村の有する有形無形の財産を村の宿泊観光へ結びつけることができるか。そう考えてこの事業が始まった。

主な事業として次の三つが実施された。

- ①農村民泊の推進
- ②体験学習型イベントの開催
- ③村の語り部である「インタープリター」の養成

第一の農村民泊の推進は、奈良県立大学の協力を得て実施された。最初に行われた農村民泊モニターツアーでは、参加者がたくさん集まったものの、初めてのことで受け入れ農家がなかなか決まらず、観光ボランティアの会の役員が引き受けるという一幕もあったという。

第二の体験型学習イベントとしては、山添村に

あふれる自然をバックに「七夕のつどい」や「星空観察会」などに取り組み、東京など遠方からも参加があった。星空観察会は「気ままに星空観望仲間」というアマチュア天文家たちの協力を得て夏冬に数回実施された。

こうした取り組みの結果、07年度1年間の農村民泊モニターツアーは参加者が38名、協力民家8軒とペンション1か所。これらの事業で山添村に泊まった人は116名、本事業にかかわっての直接の観光客増約1,600人、その他行事参加者を含めると約19,000人と大きな成果をあげることができた。

「何もないと」思っていた村が自分たちの村の掘り起こし、地域資源の活用を始めたことによって、たくさんの観光客を呼び込むまでになってきた。そして、訪れた観光客が村を気に入って友人知人を呼んでくる。そんな好循環が徐々にではあるが着実に回り始めている。

観光ガイドはボランティアであるが、観光客に村内のバス会社を使ってもらい、食事は村内のレストランで、宿泊は村内の農家民宿やペンションで、土産や買い物は花と野菜の産直施設「花香房」でと、村内で消費が行われ、村内の業者や村民が潤うしくみも確立されつつある。



花と野菜の産直施設「花香房」

そうしたなか、農山村の魅力をまるごと体験できる農家民宿が村内に誕生した。08年に奈良県から農家民泊として認証された「里舎（みちのりのやど）」である。野菜の収穫や茶摘み、コンニャ

クづくり、餅つきなどの農村体験をしながら農家に泊まることできる。山添村に滞在しながら、村の自然、生活、文化など村の魅力を体感できる宿泊施設である。

■里舎（みちのりのやど）

08年7月に県から「農林漁業体験民宿（農家民泊）」として認証された宿泊施設。古い民家に泊まり、農作物を収穫し、もぎたて、堀りたての野菜を味わうなど、農山村の素朴な体験ができる。1日1グループ限定、8畳と6畳の2部屋を使える。1泊2食付きで8,300円。無農薬の新鮮な野菜料理をオーナーの手づくりで味わえるのも魅力の一つ。騒がしい都会を離れ、のんびりと素朴な体験をしたい若い女性や家族連れなどに人気がある。最近では外国人もクチコミで泊まりに来る。



古い木造の民家で、田舎暮らしが体験できる。

泊まりは、8畳と6畳の和室で。



お風呂は五右衛門風呂。サウナもある。



食事は、囲炉裏を囲んで。オーナーの手料理で採りたての旬の野菜料理が味わえる。



里舎（みちのりのやど）

〒630-2342 奈良県山辺郡山添村広代 1222
TEL 0743-85-0525 FAX 0743-85-0832
E-mail:michiyado@joysite.jp
<http://joysite.jp/michiyado/>

近畿地方整備局「まちづくり賞」を受賞

冒頭に紹介したように、山添村は鉄道もコンビニも有名な観光地もない村である。そうした厳しい条件の村ではあるが、村民が立ち上がり「村内の観光資源掘り起こし」「フォトコンテスト」「農村民泊」などに積極的に取り組んだことにより、年々観光客を増やしてきた。そのことが、また地域に新たな活気を生み出している。

本年12月2日に、村民のこうした努力と実績が評価されて、近畿地方整備局の第2回「ゆめづくりまちづくり賞」の「まちづくり賞【まちづくり部門】」を「山添むらづくり協議会」が受賞した。今回のテーマは「地域独自の個性や魅力を活かしたまちづくり」で、「誇り」と「こだわり」のある取り組みやアイデアが求められた。

今回の受賞は、村の財政難、過疎化、高齢化など地域の置かれた厳しい環境にも屈せず、村民が自立を目指し、地域資源の掘り起こし、観光資源としてのむらづくりを地道に取り組んできたことが評価されたものと思われる。

とはいえ、足もとの状況はまだまだ厳しい。奈良県市町村別推計人口によると、本年10月1日現在の村の人口は4,234人。この10年間で2割近くも減少している。減少のテンポはむしろ加速している。

もちろんこうした現象は山添村に限らない。県南部の吉野郡や東部の宇陀郡などの町村では同じ悩みを抱えている。

山添村の地域資源を活かしたむらづくりの例は、こうした共通の課題を持つ県内町村に希望の光を与えるものとして特筆されるものと言っていいだろう。山添村の取り組みは、滞在型観光、スロートーリズム、グリーンツーリズムなど時代のキーワードを含んでおり、今後奈良県が取り組むべき新しい観光のお手本としてもとらえていくべきものとする。

（井阪英夫、山城 満）